

117(8): 4027-4033.

Tada, K., Y. Shimpuku and S. Horiuchi. 2020. Evaluation of Breastfeeding Care and Education Given to Mothers with Low-birth-weight Babies by Healthcare Workers at a Hospital in Urban Tanzania: A Qualitative Study, *International Breastfeeding Journal* 15(1): 36.

UNICEF. 2021. Tanzania—UNICEF Data. (https://data.unicef.org/wp-content/uploads/country_profiles/United%20Republic%20of%20Tanzania/country%20profile_TZA.pdf) (2021年10月19日)

Yaya, S., O. A. Uthman, F. Okonofua and G. Bishwajit. 2019. Decomposing the Rural-urban Gap in the Factors of Under-five Mortality in Sub-Saharan Africa? Evidence from 35 Countries, *BMC Public Health* 19(1): 616.

古沢ゆりあ. 『民族衣装を着た聖母—近現代フィリピンの美術, 信仰, アイデンティティ』清水弘文堂書房, 2021年, viii+264 p.

宮脇聡史*

本書は、著者が2017年に総合研究大学院大学に提出した博士学位論文を修正加筆したものであり、近現代フィリピンにおける、民族衣装や民族のシンボルを身にまとったさまざまな聖母像をその研究対象とし、像の成り立ちや普及の背景とこれをめぐる言説、作り手の意図や受け手の思い、グローバルな価値基準の影響のもとこれを評価する内外の人々のまなざしを描き出している。そして聖像の多様な位置づけを、美術、信仰、そして国民

的なアイデンティティの問題を組み合わせ、論じることで解明しようとしている。

「はじめに一聖画像が“生きている”国」で著者は、聖像がフィリピンの人々に特別の強い思いを抱かせることについて自身の経験から引き、印象的な導入を作り出している。

「序章 民族衣装を着た聖母—包摂と異化の視覚表象」は聖母像の現地化をめぐる背景について概観している。まず「民族衣装」というアイデンティティ表象を用いることを「文化の客体化」とし、それが近代以降の聖像の現地化の特徴であると指摘している。またアジアの聖母像の現地化の事例を紹介し、そこでの「宣教美術」や「土着キリスト教美術」に関心を示す西洋人宣教師などの外部者の存在の重要性を挙げ、現地の動きと国際的な動向の相互関係の中で、各地で現地の衣装をまとった聖母像が創出されたとする。

「第一章 フィリピンにおける聖母崇敬の歴史と図像—マゼラン上陸からピープルパワーまで」は、フィリピンにおいて聖母崇敬と聖母像が定着し現在に至る過程を描いている。また現代の信者たちによる聖母崇敬の実践と、そこでの聖母像の役割を概観している。多様な称号の聖母像が広く崇敬され、聖母像行列などの行事がもたれていること、新たな像の導入や創出が続いていることが丹念に描かれており、こうした歴史と信仰実践が民族衣装の聖母像の誕生の背景にあるとしている。

「第二章 バリントワックの聖母—革命とフィリピン独立教会」は、フィリピンで最初の現地の衣装をまとった聖母像とされる「バ

* 大阪大学大学院言語文化研究科

「リントワックの聖母」について、フィリピン民族主義とキリスト教を背景としたシンボルの操作と新たな表象の生成を、歴史資料から明らかにしている。この聖母像は20世紀初頭の独立革命期にカトリック教会から分離したフィリピン独立教会で生み出され、民族衣装をまとい革命の闘士の夢に現れて彼らを救ったという由来譚をもつ。著者はこの伝説と像が生成した時期について文献資料をもとに検討し、図像は1924年までに成立し、その考案者はイサベロ・デ＝ロス＝レイエスと推定されるとしている。また、この像が「母なる祖国」の象徴とされることを踏まえ、図像学における「祖国」の擬人像である女性像と位置づけが可能であること、またフィリピン独立教会の合理主義的・民族主義的思想が反映されている点を指摘している。

「第三章 ガロ・B・オカンボ作《褐色の聖母》—ローカルカラーとフィリピン近代美術」では「褐色の聖母」という絵画作品を取り上げ、画家の提示しようとした自文化像と、外国人を含む受け手が求めたフィリピンらしさとの間、アイデンティティの交渉過程という観点から解釈している。フィリピンにおける近代美術運動の中で画家オカンボが、聖母子像という西洋美術由来の主題を再解釈して聖母をフィリピンの農村女性として描いたこと、ある宣教師の擁護で評価が好転し、以後海外でも展示されるなど美術界に一定の影響を与えたことを考察している。また最初の展示当時の新聞記事の写真と現存の作品が部分的に異なる点を指摘し、作品の評価の変化が作品改変につながった可能性を論じて

いる。

「第四章 バランガイの聖母—信仰刷新運動、民間信心、奇跡譚」では、西ネグロス州シライで戦後設立されたカトリック信徒団体バランガイ・サン・ビルヘンの現地化した聖母像「バランガイの聖母」の由来と実践をフィールドワークに基づき描き出し、共同体の中での受容や奇跡譚に着目して考察している。この聖母像は組織の創設者の依頼で作成され、この信仰刷新運動の守護聖人となり、既存の西洋式の聖母像と並んで崇敬されてきたという。著者はこれを、現地の衣装をまとった聖母像が、民族アイデンティティという近代国家的な言説を超えて、ローカルな民間信心の文脈で受容されていると解釈する。

「第五章 新たに生み出される現地の聖母—『フィリピンの聖母』と『フィリピンのマドンナ』」では、近年登場した現地の聖画像である「フィリピンの聖母」と「フィリピンのマドンナ」を紹介している。ギマラス島のトラピスト修道院の神父が着想し、島の先住民の職人に制作させた「フィリピンの聖母」の彫像と、マニラ在住のある信徒がキリストのお告げを受けて聖母崇敬を広めるべく画家に描かせた「フィリピンの聖母」の絵画、マニラの聖パウロ修道会で画家の神父が描く「フィリピンのマドンナ」は、フィリピンの母親の理想像や、フィリピン社会の刷新への祈願といった「母」や「国」というイメージを打ち出し、視覚化している、とする。

「終章 まとめと考察」では各章の議論を要約したうえで、聖母が民族衣装をまとうという現象について、近代国家や近代美術の形成

という文脈の中で生み出されるものと、従来のローカルな信仰実践の中で実現するもの、という2つの方向があることを指摘している。キリスト教美術の現地化をめぐる国際的な動きの文脈の中の複雑なまなざしの交錯、崇敬の対象としての聖画像と近代美術の概念の相違と連続性、信心のあり方や民族的出自の多様性といった論点を確認し、さらなる調査が必要な課題を挙げている。

本書は、近年活発なフィリピンにおける宗教実践についての人類学研究の中に位置づけられるが、聖母信心については個別研究を超えて広範な意義を解明しようとした研究は少なく、デラクルスの聖母研究の成果 [De la Cruz 2015] に続く貴重な業績といえる。

既存の聖母崇敬の研究は在地の宗教実践の解明を中心課題としており、これに対し民族衣装をまとった聖母像を対象を絞り、人類学だけでなく美術研究の観点を織り込んだ本書は過去に類例がない。「もの」としての宗教実践に着目し、グローバル、ナショナル、ローカルといった多層的な捉え方を重視しているバウティスタの研究と重なる関心であり [Bautista 2019]、今後のフィリピンの宗教実践に関する研究の発展のひとつの方向を示している。また各事例の詳細な叙述も優れている。特にガロ・オカンボの「褐色の聖母」が改変の過程を経ていたことを過去の資料を踏まえて明らかにしたことは重要な発見と考えられる。さらに本書は、従来の研究が軽視しがちだったグローバルな流れ、特にカトリック教会の方針や聖像をめぐる教会の世界大の動向、美術に関する国際的な潮流などの中

に、ローカルな実践を位置づけることに成果を上げている。

但し、課題と思われる点も散見する。各章の素材の多様性は本書の内容の豊かさを示す反面、統一感に課題が残る。近代主義的な少数派宗教、近代美術、地方の信徒団体による信心業、個人や聖職者によるキリスト教の現地化の試み、と主体と行為がまちまちで、共通項は「フィリピン」というナショナルな空間の中での民族衣装を着た聖母像、となる。研究対象の設定の時点で、グローバルなものやローカルなものに合わせて考察するという本書の趣旨からは本来は再吟味の対象となるべき「フィリピン」というナショナルな空間の設定が、ほぼ自明の前提として扱われている。ナショナルなものを共通項として語るとはどこまで有効なのか、という点については課題が残る。

また著者が指摘するとおり、フィリピンでは民族衣装を着ない聖母が主流である。その中で民族衣装を着た聖母がどう位置づけられるのかについては、民族主義やアートの文脈では作り手の意図との結びつきが明快に示されている反面、宗教実践の文脈ではかなりあいまいである。評者は特に、5章における、聖母子像として描かれた絵が、ある人にはただの母子の絵と認知された、というエピソードが印象に残った。作り手が民族衣装を着た聖母像を企図しても、それが他の聖母像と同列扱いだったり、逆に受容どころか、それと理解すらされないこともありうる。民族衣装を着た聖母が「認知されない」「理解されない」可能性すらあるという、本書の研究

の土台を問い直すような検討も不可欠ではないか。

加えて、歴史記述で1986年の民主化革命に触れているので、これを記念して建てられたエドサ大聖堂の上に屹立する「エドサの聖母像」についても触れるべきではなかったか。この像のもつ政治的な含意についてはクラウディオによる鮮やかな分析がある[Claudio 2013]が、そこには街の景観やその中における聖像の美術的（あるいは図像学的）な考察はみられない。著者による今後の取り組みに期待したい。またローカルな文脈での聖母像も政治性を帯びるという点は、第4章の叙述から明らかである。バラングイ・サン・ピルヘンの創始者が、共産主義に対抗するため、共産党の組織のあり方を参考に活動を作り上げた点の指摘があるが、これを大地主制の社会矛盾というローカルな文脈や冷戦下のカトリシズムと共産主義という国際的な運動同士の対立と交渉という文脈に乗せて、聖像の置かれた位置を考察する余地もあるのではないか。

以上の課題も、本書の成果や意義を踏まえたところから生じるものであり、本書の価値を減じるものではない。本書は宗教実践や美術に関する新しい研究領域を開いており、著者や評者自身を含めた研究者たちに多くの課題を投げかけている。

引用文献

Bautista, Julius. 2019. *The Way of the Cross: Suffering Selfhoods in the Roman Catholic Philippines*. Honolulu: University of Hawaii Press.

Claudio, Lisandro E. 2013. *Taming People's Power: The EDSA Revolutions and Their Contradictions*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

De La Cruz, Deirdre. 2015. *Mother Figured: Marian Apparitions and the Making of a Filipino Universal*. Chicago and London: University of Chicago Press.

清水 展. 『噴火のこだまーピナトゥボ・アエタの被災と新生をめぐる文化・開発・NGO』(新装版), 九州大学出版会, 2021年, 392 p.

土田 亮*

本書は1991年6月15日に起こったフィリピン・ルソン島西部ピナトゥボ山の大爆発を契機に、「甚大な被害をこうむった、先住民アエタの被災と生活再建の歩みの記録であり、それに関わった私自身の関与についての自省と総括であり、(中略)被災を契機として彼ら彼女らが先住民としての自覚を強め、民族としての再生あるいは新生と呼びえる状況を作りだしてきた経緯についての報告と考察」(p. 1)であり、著者が10年以上にわたって現地に赴き、現場の行き詰まりを切実にまとめた労作である。なお本書は2003年に刊行された同題本に、新装版あとがきと前書きのカラー写真を追加したものである。

本書は序論・結論を合わせた8章から構成されている。以下では、本書の構成について紹介する。

第1章「序論」では、本書が出版される

* 京都大学大学院総合生存学館